

令和8年度

印西市民アカデミーだより

第3号

講座 4：里山について学ぶ

5月23日（土）、NPO法人「谷田武西の原っぱと森の会」の矢野氏と一般社団法人SODOの佐竹氏を講師に迎え、里山について学ぶ講座を開催しました。



里山とは、人の手が入らない自然ではなく、薪の採取や草刈りなどを通して、人々の暮らしと関わりながら維持されてきた森林や草地のことです。かつては定期的な手入れによって日当たりの良い場所や木陰など多様な環境が生まれ、多くの動植物が生息する豊かな自然が育まれていましたが、生活様式の変化により手入れが行き届かない森林が増えています。

印西市を含む北総台地には「谷津（やつ）」と呼ばれる特徴的な地形があります。雨水が地中に浸透して地下水となり、湧水として地表に現れます。これは「谷津の湧水」と呼ばれ重宝されてきました。湿地や田んぼを潤し、生きものの生息環境を支え、水を蓄えて洪水を防ぎ、水質を浄化する役割を果たしてきたそうです。さらに、現在の谷津地形は古くから受け継がれてきたものであり、開発を免れたことで、貴重な自然環境が残されているという話にアカデミー生は興味深そうに耳を傾けていました。



現在では、印西市の里山を守るため、市民団体による保全活動が長年続けられています。2005年には県による土地売却計画をきっかけに7つの市民団体からなる「北総里山クラブ」が結成され、谷田武西の里山の不法投棄ごみの撤去などの活動を経て千葉県より印西市への土地の無償譲渡が実現しました。

「谷田武西の原っぱと森の会」は2009年から活動を開始し、草刈りや外来種の駆除を行うほか、自然観察会や子ども向けイベントを通じて里山の魅力を伝えています。一方で高齢化や会員数の減少に対応するため、市民団体や行政、専門機関などが連携する「印西里山グリーンインフラ推進協議会」を設立し、持続可能な里山保全の仕組みづくりを進めています。



アカデミー生からは国や市の開発方針との兼ね合いや市民団体の在り方についての意見も出され、これからも自然を守り続けるにはどうしたらいいか等の活発な意見交換が行われました。